『児童研究』 第96巻、2017年、102-109

児童健全育成賞（數納賞）奨励賞

「この子と生きる幸せ」

山梨県甲州市
天理教山梨分教会　教会長　武　井　久　次

里親登録

いつの頃からか友人の中で里親を始めた人が何人もいて、その趣旨と実働の大切さや大変さを見聞きしていました。ですから私の胸の内には、できることなら今すぐにでも里親をさせて貰いたい、という思いがありましたが、時期を待つ必要がありました。

私の思いつく行動に、今度は何だろうかと心配でドキドキしているらしい家内の全面的協力が必要です。何かと人の出入りも忙しく、高齢の母を看ているその時の状況では無理でした。

やがて母が亡くなり、その大切なつとめも終えた数年後の平成21年夏。「里親をやらせてもらう！」家内から待望の言葉を聞く日が来たのです。

結婚以来、私達は『一姫二太郎』と云われる３人の子宝に恵まれ、特に大きなこともなく20年間の夫婦、そして親子関係を順調に築き通ってきたつもりでした。ところが、その年の１年くらい前から、末っ子でやんちゃタイプの次男にいろいろなことがあり、高校を退学することになったのです。その一連の出来事や親として対処する動きの中で、家内は次のように思ったそうです。「子供のことでこういう苦労をするのなら、里子を迎えてその子供のために苦労をする方がずっといい」と。

家内は「人間が与えられて通る荷物の量については神さまが決めて下さるもので、同じ通るならもっと喜べる形で荷物を背負いたい」と考えたらしく、何年間も待ち続けた私の思いは、次男のやんちゃのおかげで叶えられることになったのです。

さっそく養育里親を志願し、二人揃って研修に通うことになりました。夫婦で研修を受けるということも、普段見られないお互いの横顔がチラチラと見えかくれして、何だか新鮮で楽しかったのを思い出します。

平成22年３月25日、私達夫婦は養育里親として登録されました。

一時保護の出会いと別れ

養育里親では、一時的な事情により育児が難しい期間を一時保護委託されるケースも多くあります。私どもの処でも、里親登録後すぐに一時保護委託として生後２カ月の男の子を数カ月間、その後に２歳の女の子を数週間お預かりしました。

じゅうたんを新しくしたり、安全な環境を整えたりしながら子供の来る日が楽しみでした。相手が赤ちゃんでしたからいろいろ手もかかり、大変といえば大変ですが、それにも増して可愛くて、親元に帰る日は「元気で幸せになってね」との思いで一杯になります。そのあと胸にポッカリと穴が空いた様になるのも、人生の機微というものなのでしょう。

生後１カ月の緊急保護

それから間もない平成22年11月20日。保護が必要になるかも知れない子があると依頼の連絡があり、家内と相談の上お受けすることにしました。その10日後の11月30日に、アイちゃん（仮名）は来たのです。生後40日と聞き、哺乳瓶のミルクでは難かるのではないかとの心配をよそに、ごくごくとミルクを飲み、さらに続けて飲みました。良かった～と安心した私達は、あらためてアイちゃんの様子をよく見てみると、太ももとは言えないほど細くて真っ直ぐな足。顔に生気はなく泣きもしない上、呼びかけに反応もありませんでした。その後、おしっこが出ないことが気になり、何度もおむつをのぞきこんだりしましたが、その間に幾度もミルクを飲んで、よっぽどの時間が経ってから茶色くて濃いおしっこが少し出ただけでした。

「脱水状態、それもぎりぎりのところだったのかもしれない…。」身体も軽く、弱々しい表情のアイちゃんを抱っこしながら、生きてここへ連れて来てくださったことに感謝し、「よく頑張ったね」と、この子のこれまでとこれからを思う私達の胸には、親になる決意のようなものが湧きあがっていたような気がします。

ぱさぱさの粉の様に見えるウンチが出てから、アイちゃんは泣くようになりました。そして、その声はだんだんと力強くなり、やがては私達の悩みの種になってゆくのでした。

この子の親になるこころの道

夜、寝られない…。それも、普通の寝ないというのとは度合いが違う感じです。夜が怖いという感じで、泣き続ける。抱っこしても歩いても泣き続ける。やっとの思いで寝かしつけて、へとへとの体でベッドに寝かそうとすると狂ったように泣き出す。たまにうまく着地しても20分もするとまた泣き出す…。もうこれより仕様がないと覚悟して、抱いたまま背もたれに寄りかかって朝を迎える日が続きました。

子育てには自信の様なものもあったのですが、全く歯が立ちません。私達の寝不足はボディブローのように効いてきて、自分自身のこころの中で小さなズレというのか、良心の帳尻を合わせきれなくなったいら立ちのようなものが吹き出しつつありました。私の奥底にひそんでいる我儘で短期な性分の根っこをあらわに引き出され、そんな自分と向き合うことを余儀なくされる日々。いつも横になれば５秒で寝ていると家内に言われて来た私ですが、夜になるのが辛くなりました。

しかし、有り難いことに大変なのは夜だけで、昼間はほとんど困ることはなく、ミルクを飲むと眠る。おむつを変えると眠る。お風呂もご機嫌で入るし、身長も体重もグラフの真ん中あたりを辿っていて順調でした。特に具合が悪くなることもなく、夜の試練の時間を除けば、本当に手のかからない楽な子という印象で数カ月が過ぎて行きました。

実母に悪気のないことは、うかがい知れるところですが、能力的、資質的な問題を抱えていたようです。それを補うに足りる存在がその家にいなかったことが、この子にとってどれくらいの生命的苦痛と恐怖の日々を強いることになっていたのか…。生後40日の間の出来事がこの子にどのように受け止められ、そのこころや魂に刻まれたのか、私にはよくわかりません。ただ、胎児としてお母さんのお腹にいる時から優しい語り掛けをしたり、音楽を聴かせることが良いとされるのを聞くにつけ、この子のこころには、大きな傷や辛く苦しかった記憶がなんらかの形で残っているのだろうと思います。

月日は流れ、アイちゃんは元気に育っていましたが、相変わらず夜はよく眠れない体のまま２年が過ぎた頃、寝る部屋を変えてみようということになりました。もっと早くに思いつかなかったのかという気もしますが、そういう余裕もなかったのかも知れません。とにかく、いつもいる居間にそのまま布団を敷いて寝ることにしてみよう！と考えたのです。そこにはテレビもあり、先ほどまで遊んでいたそのままで、あまり暗くせず、眠くなったら眠るという感じに

してみました。寝室に移動するのが怖いのかも知れないということと、さあ寝ましょう、という感じがこの子には受け入れ難いのかもしれないという推察からでしたが、その頃は食事やお風呂など、何かを始めることがことごとく難しくなっていたのです。この思い付きは大きな収穫をもたらしました。私達にとってということですが、この子が起きていてもあまり愚図らなくなり、泣きわめくことが少なくなったのです。

２歳のころは一番手のかかる大変な時期とはいえ、この子のあらゆる日常の中に、少し違う難しさを感じ始めたのがこの頃だったと思います。

その時の状況に合わせることは難しく、遊んでいるのを座らせようとすると奇声を上げる。周りの人からは我儘な子と見られ、しつけの出来ていないことを、責められるようになってきました。

そんなこの子の姿を受け入れることが出来なくなると、力ずくで言うことをきかせようとして大きな声を出している私がいます。そんな時は長い深呼吸をしてみたり、その場を離れて気持ちを切り替える時間を持つようにしています。距離が必要な時は、夫婦のコンビネーションの発揮しどころで、私が熱くなって来ると家内の優しさが光出しますし、家内が小噴火すると私のひざが安全地帯になっています。この子は普通とは少し違うということを胸に、向き合い方を模索する毎日でした。

児童相談所の心理士の見立てにより、知能の発達が普通より一年以上遅れていると聞かされました。そういえば言葉も遅く、「いく」とか「たべる」という片言の単語と幾つかの名詞しか言いません。おむつも、その後４歳になっても一向に卒業できそうもなかったのですが、私達は周りの子ども達より何年遅くてもいずれ出来るようになり、いずれ分かるようになればそれでいいという気持ちになっていました。

時折「トイレに行ってみる？」と、さりげなく探りをいれますが、「いや～っ！」と激しい即答が返ってきます。この子のおかげで、私達は許容する力と待つ力を身につけることができた様に思います。

居間の中心は堀ごたつになっていて、よくそこに入り込んで楽しそうに遊んでいますが、いつの頃からかアイちゃんはそこに入るとウンチをするということになっていました。食事中に下から匂ってくるということもよくありましたが、ちゃんと食べられているのか気になっていますので、そんな時もなんだかホッとします。いつも快便で、出なくて苦しんだりすることは一度もなくて、これも有り難いことです。

基本的にアイちゃんは高いところに登ることが好きなようで、教会の礼拝殿の太い柱を起用に登っては「見て～っ！」と、得意の様子。机の上に置いてある大型テレビの上に登っては、こちらの反応を見ています。「すごいね～」と褒めてあげられる時はいいのですが、そうもいかない時などは更にしつこく繰り返し見せてくれます。やめさせようとすると、これがまた、絶対に屈しない覚悟が感じられる激しい奇声を発しますので、とにかく居合わせる人に謝ることにしています。

この子のおかげで謝る機会をたくさん頂きますが、自分の子どもの頃を振り返って考えれば、これも親の仕事のひとつだとよく分かります。自分達の間違いや至らないところを認め、謝ることはとても大切ですが、また難しいことでもあります。勝ち気の強い私達には、まだまだ謝る勉強が必要なようです。

アイちゃんは食べ始めた頃、何でもよく食べ、野菜は今でも大好きです。いつの頃からか、一緒に食べずに少し離れたところにいたり、下に置いて食べたりして、決められたスタイルに合わせるようにすると、抵抗するようになりました。自分から一緒に食べるようになるのを待つことにしています。協調性がないと言われても、恰好が悪くても、健康を損ねないだけの栄養が摂れていれば良しとすることにしました。

今ここで何でもちゃんとさせようとすると、こちらが一杯一杯になってしまい、この子との関係が崩れてしまう。何度か経験したことです。

この子と私達にとって、いま一番大事なことはなにか…。そして、今のこの子を大切にすること。そのつど考えるようになりました。

親は子どもの存在によって育ててもらうものですが、この子の親になる道は楽ではなかった分、得たものは大きいように思います。

「いけるかな～保育園」

年小組は見送ることにして、４歳になったら年中さんから入れてもらえる保育園を探すことにしました。児童相談所の担当職員の方が、何かと心配して訪ねて下さり、これまでの様子や現在の状態を踏まえて、児童相談所内のクリニックで見立てをしてもらうことになったのです。結果は、自閉症に加えて注意欠陥多動性障害もあるかも知れないとの見立てでした。「住んでいる所が広くおおらかな環境のため、これまで大きな問題にならずにきたのでしょう。」そう言われた時には、天から労いの言葉を頂戴したような心地でした。それともう一つ、こころの発達に障害があると聞き、私達はほっとしました。理由が分かることにより、「どうしてうまくいかないのだろう」、「何とかしなくては」という胸の内の焦りや、周りから責められる言葉と無言のプレッシャー等から解放されたような気持ちになったのです。

平成27年４月。入園式の日を迎えました。大勢の人が並ぶ式場の中に入り、パニック状態に陥りそうな気配でしたが、アイちゃんは園児の席ではなく保護者席の私の膝に座りこみ、後ろから抱える腕の中で周りの様子を窺っていました。しだいに落ち着きがなくなってきたアイちゃんは、私の髪の毛をくしゃくしゃにしたり、ネクタイを引っ張ったりして限界をアピール。クールダウンのため、外に出て滑り台のところで遊んでいましたが、会場から歌声が聞こえてくるとまた中に入り、その後は他の園児たちや先生と一緒に行動することができたのです。

「なんとかなるかもしれない…。」難しさと希望とが交錯した、忘れられない入園式になりました。

間もなく初登園の日。大好きな次男の彼女の「まいちゃん」が買ってくれた赤いかばんを肩に、意気揚々と出かけました。そこまでは良かったのですが、駐車場で車を降りる頃には不安に包まれた顔で「抱っこ！」となり、園舎に着くとしがみついて離れまいとするアイちゃんでした。ほっぺたをくっつけ、ぎゅーっと抱きしめて急速充電開始！「いち、にい、さん…」大きな声で10まで数えると、なんとか担当の先生に預けることができました。アイちゃんの為に、組の先生とは別にもうひとり先生が付いてくれています。「帰る～」と言い出さないうちに逃げるように園舎を去りましたが、初日の送り込みは成功です。

ただし、そこに行くまでには、こちらの思いはことごとく外されて、帽子は被らない、園服は着ないという問題児スタイルでしたが、とにかくアイちゃんは保育園年中さんにデビューしました。

その後も、自由服と車から歩かないスタイルを崩さず、ぎゅ～っと抱きしめる儀式を守ってなんとか通園を続け、秋の運動会の時期を迎えることができました。送り迎えの時に、運動会の練習風景を垣間見ることがありましたが、皆が整列して順番にとび箱を練習しているのを横に、アイちゃんはひとり滑り台で遊んでいます。先生の寛大な対応に感謝し、それでもそこに居られることを有り難く思いました。

運動会当日は仕事で行かれませんでしたが、家内と次男、「まいちゃん」とそのお母さんまでもが観に行ってくれました。次男が撮ってくれたビデオのなかで、先生に手を引かれながらも、跳び箱を飛んだり、鉄棒の前回りやでんぐり返しをしているアイちゃんの姿を見た時、これまでになるには、どれほど保育園の先生にこころをかけて頂いたかと思うと、手をあわせるような気持ちで喜びを味わいました。アイちゃんはこのビデオがお気に入りで何度も見ては踊ったりしています。

保育園に通うようになってからは、お友達のすることや遊ぶ姿などから得た、視野の広がり

を感じるようになりました。言葉も単語から文になり、思いを言葉で伝えられることにより、落ち着きがでてきたのかも知れません。いきなり機嫌が悪くなることや、奇声をあげることが少なくなったように思います。また、こちらがその要求に応えることができない時も、「とーとばーか！」だとか、「ばかちんが」とか、自分の気持ちを言葉によって表現することができるようになったのです。

こころ模様

28年1月30日。この日、昨年結婚した私達の長女に女の子が誕生しました。アイちゃんにとって「にーに」や「ねーね」は、私達とはひと味違う身近で大切な存在です。「ねーね」に赤ちゃんができたことがこの子にとってどういうことなのか、深くまではよく分からないのですが、その頃からアイちゃんのこころの状態は揺れ始めたように思います。

赤ちゃん返りとよく言われますが、なんだか少し前の感じに戻ってしまい、いろいろな事が出来なくなりました。保育園もつれて行くことが難しくなり、行っても離れることができずに帰ってきてしまう…。しばらく休んで「ねーね」のところへ泊りに行き、赤ちゃんが生まれても「ねーね」の存在は変わらないことを感じることができるように、ゆったり過ごしたりして、段々とその問題は解消していったようでした。

新学期を迎えると年長さんのクラスですが、慣れ親しんだ園舎から新築の園舎に移ることになりました。木造の平屋で、素敵な空間と暖かいイメージの素晴らしい建物なのですが、環境が変わるということがアイちゃんにとっては、大きなハードルだということがよくわかりました。その後、具合が悪くなってしまったり、だいぶ良い感じになっていた夜も全く眠れなくなってしまい、また通園が難しくなりました。

担当に付いてくれていた先生がご結婚され、園を離れることになったのもアイちゃんにとっては大きなことだったのかもしれません。

今日は来るだろうか、明日は来るだろうかと、園の先生方の心配される気持ちを受け、何とか連れて行こうと試みますが上手くいきません。今まで通用していたアプローチもいっさい役にたたず、お手上げでした。

この子は、私達の前では奇声を上げたり、「ばーか！」と怒ったり、その感情をあらわにしますが、保育園ではしゃべらず、暴れることも飛び出していくこともなく、困ることは何もないと言われます。わきまえているのか、そこに線が引けているのだと思います。ひょっとすると、この子の中でその線が限界なのかも知れない。爆発してしまうのを避けるため、行きたくないのかもしれない。ここまで抵抗するのには、何かそれだけの理由があるのだろうと考えました。

夏も過ぎた頃、お世話になったT保育園を退園することにしました。それでも、また行ける様になれた時のために、籍をおいて下さる配慮を頂き、重ね重ねありがとうございます。

周りの人たちとの関わり

春・夏・冬に3～4泊のお泊り会をしていますが、来る子供たちの中に、近くにあるK学園という養護施設の子どもさんがいます。4年生～6年生の3人兄弟で、4年位前から短期里親の帰省として来ているのですが、アイちゃんはこの3人が大好きで、何日も前から楽しみにしています。真ん中のK君はやんちゃタイプで、最初の頃はよく兄弟でケンカになったりしました。最近はそんなこともなく、来るたびに成長を感じます。朝は6時起床、お掃除や、一手一つにこころを合わせる楽器演奏、生きていく上での大切なこころの話などをします。皆きちんと正座をして真剣な表情で聴いてくれるものですから、こちらも真剣に話をし終えると、「うお～っ」と叫び、痺れた足をさすり出します。真剣な表情は耐えていた顔かも知れないのですが、どちらにしてもこの子達にとって良い時間だと思っています。外に出てのゴミ拾いも一生懸命に、また楽しくワイワイと行ないます。その道中の少し横に入った所に、ほとんど遊びに

来る子供はいないだろう空き地の公園があります。そこに、ギーギーと音をたてるゴンドラのような長い形状のブランコがあり、みんなで乗って大騒ぎです。壊れないように祈りながら、この乗り物もきっと喜んでいるのだろうと思うと、そこはお掃除コースから外せません。

その他に数名の子ども達が一緒に泊まりますが、みんなひとつの家族、兄弟のようにじゃれ合い、お風呂に入り、広い参拝場にふとんを並べて眠ります。ふとんに入ってもこそこそ、クスクスと笑い声や「やめて〜」とか「ごめんなさい〜」などの声が上がっているけれど、そのうち静かになり、楽しい一日が終わります。

山梨県では地域のこどもクラブや育成会の行事が盛んです。正月にはお楽しみ行事がありますし、夏はバスに乗ってレジャー計画が行われるのですが、私も役員をしているため、まだ幼いアイちゃんをその場につれていきます。なにかと交流がある地域性のおかげで、この子のことは多くの方が理解して下さり、お下がりの服や使えそうなものを持って来て下さる方もあります。行事の時には、必ずそばに来てくれる小学生のお姉ちゃんがいて、こういう優しくて静かなタイプの人が安心なのだろうと、少し離れた所から見て思ったりしています。

教会にいますので、その分多くの方との出会いもあり、アイちゃんを可愛く思ってくれている人がたくさんいます。小学校の入学はだいぶ先なのですが、ある方は、もう筆箱や小物を買って下さり、可愛い袋にリボンを付けて持って来て下さいました。「ランドセルは私が」と言って下さる方は二人もあって、半分ずつ出して買って頂くことになっています。

いろいろな人に関わって頂く機会や環境があるおかげで、広く世界を見たり味わったりすることができるのは有り難いことです。こうした子のこころをあまり理解されていない方や、一般的な躾に厳しい方からは、悪く言われることもあったり、いろんな場面や状況と出会うのですが、「とーと」「かーか」を頼りに、人と関わる波を乗り越えている感じです。

情緒障害について（小学校入学に向けて…）

情緒的な症状とは大きくなるにつれて顕著になってくるものなのでしょうか。いろいろな事が認識されるようになり、そういった事がうまく整理できない状況なのかも知れません。昨年は別に問題にならなかった事に、つまずいたりする場面が増えたような気がします。この頃は雨が怖いようで、激しい雨の音でパニックのようになってしまったり、風が吹くと怖くて外にいられないようになりました。

今までは、何かにつまずいてこころが崩れた時などは、コンビニで小さなお菓子を買うことで、こころの切り替えになったりしたものです。「数字がふたつ並んでいるやつだからね〜」「みっつはダメだよ〜」と言い聞かせると「これは？」「これは？」と嬉しそうに選んでいたものですが、この頃はそこに行くことの不安が先にたってしまうのか、「コンビニ行く」とは言わなくなりました。

山梨県里親会では里親・里子同士の交流の場や、スキルアップのための研修会を行なっています。アイちゃんは小さくて参加できないことが多かったのですが、今回（平成28年９月）のスキルアップ研修では、私達が事例研修の事例担当になっていました。里親支援という立場で私たちのメンタルを支えてくださっているＴさんに、いろいろ教えて頂きながら研修会当日を迎えました。

甲府の中央児童相談所内の会場で、里親をしている同志の方々を前に、これまでのアイちゃんと私たちの様子を聴いて頂き、専門の先生にアドバイスを戴いたり、皆さんの同じような思いや、そこを通り抜けた経緯と現在の様子などをお聞かせ頂きました。共通する思いの中を通っている人の存在は、それだけでエネルギーになるという事を強く感じました。

平成28年９月17日。アイちゃんの小学校入学に向けて必要な事を確認したり、検討して下さるということで保健センターに参りました。

市の教育委員会の方と心理士の方、さらに市の保健師さんや児童相談所の担当職員と心理士の方など10人近くの方がこの子のために集まって下さるというのです。

その少し以前に、アイちゃんの再度の見立てをして頂きましたところ、情緒障害という見立ての診断書を下さいました。この子がその過敏性から、常に周りからのいろいろな恐怖心に襲われていること。そしてもう一つの問題は睡眠障害にあり、ちょくちょく目を覚ましてしまう点と、夜が怖い点については、薬もそのひとつの対策として考えた方が良いのかもしれないと言われました。

その結果を踏まえての今回の保健センターでの相談でしたが、この子の入学に向けて、市や教育委員会などこんなに大勢の方がバックアップして下さり、とても心強く有り難い気持ちで一杯です。

小学校の学区は違いますが、規模があまり大きくないK小学校の支援学級に入れて頂く方向になりました。その学校はお泊り会に来ている養護施設の３人がいます。特に支援学級には真ん中のK君がいるとのことで、その様子をこころに思い描くこともできて、なんだか少し安心になりました。

小さい時アイちゃんはおしゃぶりを離せませんでした。「いつまでそんなものをくわえてるの！」とよく言われましたが、この子が必要としている間はそれでいいと思っていました。そんなある日、突然におしゃぶりを投げ捨ててその日から卒業し、同時に哺乳瓶にもさよならをしたのです。この子はいつも突然に脱皮をして見せるので、びっくりします。

おしっこもトイレで出来るようになったのはかなり遅かったのですが、そうなると、その後は失敗ということがまずありませんでした。ただ、「ウンチはどこでするの？」と聞くと、「こたつ！」という明瞭回答を笑顔で返していたのですが、小学校に行く前のこの時期にトイレで出来るようになり、本当によかったと思います。どうやらアイちゃんは、水洗の水の音が怖くて長く座れなかった様です。最初は偶然に出来た感じでしたが、２回目からはトイレの前で「フレーッ！フレーッ！うんち〜！頑張れ！頑張れ！うんち〜！」と、「とーと」「かーか」の応援団も２ヶ月位頑張りました。普通ならすんなりと出来る事もこの子の場合、こんな風に時間がかかってしまいます。「何とか小学校に行く前に」という思いが、私たち応援団のこころをつき動かしていました。

この子と生きる幸せ

人が生きるということは、他の人と関わること。その時に生まれる心の世界を生きるのだと思います。

この子と出会ってからというもの、私達のこころの世界は、山あり谷あり、大風、大雨のような時もありました。しかし、そこを通る中に幾つもの喜びや思いもよらぬ発見があり、段々と嵐の中の面倒な対応にも楽しみを見つけられる、そんな力を与えて頂いてきたような気がします。

これまで私は、何ごとも十分で完全な姿を目指し、人の世話になることをどこか良くないことの様に思っていました。知らず知らずのうちに、その関係に優劣の様なものを、感じてしまっていたのかも知れません。この子はそんな私の偏った感覚に、全力でぶつかって来てくれたのです。

人の世話にならないという考え方は、こころの生きる世界が少なくなっていくことだと気づかされました。そして、自分の弱いところや、足りないところは周りの誰かに助けを求めることが、より豊かな生き方につながると思えるようになりました。

アイちゃんはこころが崩れると、私達を叩いたり、大きな声を出したりします。我儘の様に見られますが、それは安心感を失いかけていて、恐怖に襲われているのです。そんな時は十分に安心できるまで補充が必要です。時間が経つと「かーかごめんね」とか「怒ってごめんなさい」と神さまに謝ったりしています。

アイちゃんは、静養中の私達の長男「もとくん」のことがとても気になる様で、お菓子があると「もとくんのは？」とか「これはもとくんの」と、持って行きます。また、誰が一番好き？と聞くと「もとくんが好き」と言います。優しい25歳の「もとくん」も、少し頑張り過ぎの生き方を変える必要があるのかもしれません。

アイちゃんはどこかで遊んでいると、何かを持って来てしまうことがあります。これも障害によるこだわり行動のひとつだそうです。いけないことだということを覚える必要があります。

アイちゃんは、外からの働きかけや状況が変わることに対しては、その不安から激しい拒絶を示します。どこかへ連れていくことも大変ですが、そこから帰る時もまた大騒ぎになったりします。そんな時は少し時間をかけて、こころの重心を変える作業が必要です。

怖がりの甘えん坊、そしておこり虫のアイちゃんです。面倒な時もありますが、「とーと大好き！」「かーか大好き！」という魔法の言葉の効き目が薄れることはありません。

私達はこの子と一緒に、人と共に生きる喜びというものを、味わっていけるようになりたいと思います。

養育里親をさせて頂き、多くの方との出会いと様々な出来事を通して、豊かなこころの世界を味わうことのできる幸せに感謝いたします。